

2015 SUMMER
Vol.16

T
S
U
A
G
E

[繋ぐ]

Gorgeous and beautiful Sendai Tanabata festival attracts people around the world.

世界を魅了する
「仙台七夕」の絢爛。

伊達政宗の時代から続く、東北夏の風物詩

仙台七夕

毎年、8月7日の中日とする3日間にあたり

色とりどりの七夕飾りが杜の都を埋め尽くす、「仙台七夕まつり」。

その豪華にして絢爛な美景を楽しもうと、

国内外から例年200万人もの観光客が訪れる、誉れ高き伝統行事です。

人々の思いを重ね合わせ、約400年にわたって続く「仙台七夕」。

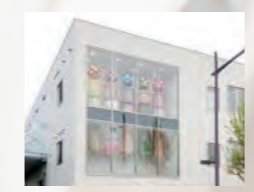
その雅やかな魅力と作り手の思いに迫ります。

愛でる
Me-de-ru

紙を愛する匠たち
「KAMI-WAZA 紙ワザ」



- 愛でる** 01 「KAMI-WAZA 紙ワザ」
伝統文化を未来へとつなぐ
仙台七夕職人のこだわり。
- 作る** 06 「PAPERCRAFT on the DESK」
手に汗握る熱戦必至!?
「トントン相撲」。
- 辿る** 08 「紙育(カミイク)」
季節の移り変わりを告げる
「夏の便り」。
- 伝える** 09 「紙が紡ぎ出すものがたり」
日本とフィンランドを結ぶ、
時空を超えた偶然。
- 先どり** 10 「EDGE of PAPER」
世界が注目する透明な紙&
お湯ができる紙製防災用品。
- 深める** 11 「KPP HEADLINE」
KPP最新ニュースを
キャッチアップ。
- 出会う** 13 「KPP人物図鑑」
営業活動の潤滑油となる
仙台支店のキーパーソン。
- 広げる** 14 「PAPER TRIVIA」
紙を重ねてつくる
山岳立体模型キット。
- 感じる** 15 「季節の一冊」
“お弁当”に秘められた
ノンフィクション群像劇。



表紙の写真
「鳴海屋紙商事本社の七夕飾り」
本社ビル2・3階の吹き抜け部分に展示されている5つの大きな七夕飾り。この写真は、そのうちの1つを下から撮影したもので、本社ビルの七夕飾りは夜になるとライトアップされ、近隣住民の心を和ませる存在になっています。



気持ちを含めた丹精な手づくりによって、 豪華絢爛の七夕飾りが生まれる。

仙台の七夕を支える 創業130年の老舗紙問屋

しなやかな青竹と華やかで大きくす玉、幾重に重なり夏風にそよぐ色鮮やかな和紙飾り。毎年8月6日から8日の3日間、趣向をこらした七夕飾りの色彩が、杜の都・仙台を埋め尽くします。

「仙台の七夕は、すべて手づくりなんですよ」。そう話すのは、鳴海屋紙商事・七夕企画室の山村蘭子さん。鳴海屋紙商事（旧鳴海屋紙店）は、仙台の地で紙類卸・販売を手がける、明治16年創業の老舗です。同社は紙の流通に加え、オーダーメイドによる七夕飾りの制作・設営や材料の販売を通して、古くから仙台七夕の伝承・発展に貢献してきた企業。山村さんは、同社6代目で統括本部長を務める鳴海幸一郎さんとタッグを組み、約30年にわたって七夕飾りを作り続けてきた、まさに生き字引のような方です。「うちでは、くす玉の竹かごをつくる人、そこにつける花紙をひらく人、

デザイン画を見ながら花を竹かごにつける人というように、すべてを分業で行っています。これには一人の人間が同じ造形物をつくることで、クオリティを均に保てるメリットがあります。すべて手作業なので決して楽ではないですが、七夕づくりは本当にたのしい。社員からパートさんまで、みなさんが楽しみながら作ってくれています」。

昨年完成したばかりの真新しい新社屋。出荷を待つ完成した七夕飾りが所せましと並ぶ傍らで、女性スタッフによる七夕飾りづくりは佳境を迎えています。山村さんを取り囲むように指導や確認を受ける若いスタッフの方々の表情は、和やかながらも真剣そのものです。

紙文化の豊かさを味わえることも 仙台七夕まつりの魅力

仙台七夕飾りの大きな特徴は、華やかな色彩の和紙で作られていること。和紙ならではの染めの美しさや手触り、です。仙台七夕の七つ飾りに使われている赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の色鮮やかな色彩は、日本固有の信仰や叙情的な感覚とからみ発展していったことがわかります。

娘さんが橋渡し役となった パートナーとの出会い

山村さんが仙台七夕の制作に携わるようになったのは、意外なきっかけから。ご主人の転勤で出身地・熊本から仙台に移り住んだ山村さんは、娘さんが鳴海屋紙商事の鳴海幸一郎さんと同級生だった縁で、その後30年にわたって仙台七夕とともに歩む転機となったそうです。「それまではまったくの素人。ただ当時、体調が思わしくなかった先代と、中学生だった幸一郎くんを助けたい気持ちだけで、七夕づくりを始めたんです」と当時を振り返ります。

山村さんは「ご主人、幸一郎さんとともにご近所に呼びかけ、集まった方々の手も借りながら、手探りで部材づくりからスタート。くす玉の芯となる竹かごの設計や竹の組み方、全体のデザインなど、試行錯誤を重ねることで、現在のスタイルを確立してきました。私にとっては親同然」という幸一郎さんの言葉どおり、山村さんが我が子を思うほどの強い愛情、困っている人を助けたいという人と人との絆が、鳴海屋紙商事がつくる仙台七夕の礎となっています。



鳴海屋紙商事・七夕企画室の山村蘭子さん。



山村さんによる、七夕飾りのデザイン画。

投網(とあみ)
仙台近海の豊漁を願うとともに、海の幸への感謝の気持ちを表した紙飾り。またその年の幸運を寄せ集めるという意味もあります。

巾着(きんちやく)
巾着とは、金銭を入れて腰に下げた財布を指します。商売繁盛、富貴を願い飾り付けると同時に、節約、貯蓄の精神を養いました。

吹き流し(ふきながし)
織女の織り糸を象徴するもの。織り糸を垂らした形を表しては織の上達を願いました。くす玉と並び、七夕飾りの主役となっています。

短冊(たんざく)
早朝、さといもの葉にたまった夜露を集めて硯にすり、その墨汁で飾に書いた詩歌や願いごとを書き、学問や書道の上達を願いました。

紙衣(かみごろも)
和紙で作った四ツ身の子ども衣装で裁縫技術の上達と子どもの健やかな成長を願うもの。竹の一番上に吊るす習わしがあります。

千羽鶴(せんばつる)
家の最年長者の年の数だけ折ることで、延命長寿を願うもの。折り方を習う娘たちは折り紙を通じ、教わる心、人に教える心を学びました。

扇籠(くすかご)
七夕飾りをつくり終えた際に出る紙くすを拾い集めて飾りにします。ものを粗末にせず他に役立て、清潔と儉約の心を育てました。

仙台七夕七つ飾り

※牽牛はわし座の主星アルタイル、織女はこ座の主星ベガの漢名。和名ではそれぞれ、彦星(ひこぼし)、織姫(おりひめ)にあたる。

紙と触れ合い、モノを作る

「PAPERCRAFT on the DESK」 TSUNAGUオリジナル

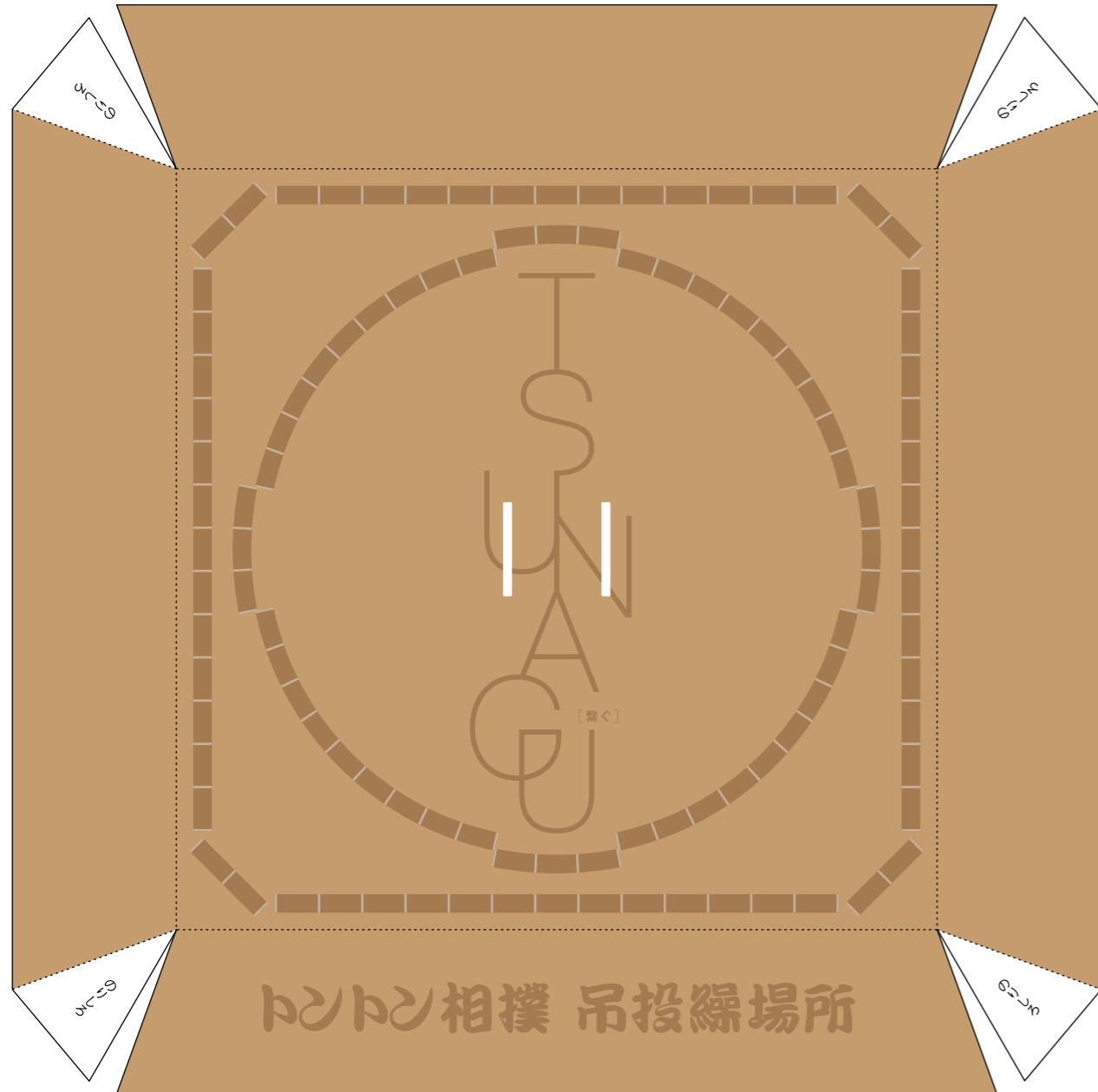
『デスクdeトントン相撲』ペーパークラフトセット

トントン相撲「吊投線(つなぐ)場所」がいよいよ初日を迎えました!

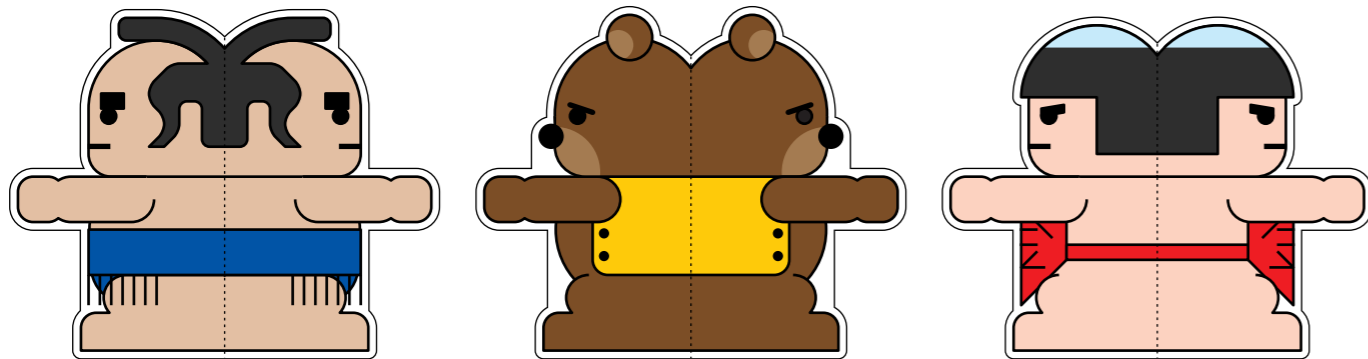
注目は、新入幕を果たした金太郎とクマの同部屋対決。優勝争いは混戦必至!?

ランチタイムやアフター5に楽しんでくださいね。

切りとり線
折線



各パーツはこちらのページから切り取って使用してください。作り方は裏面をご参照ください。



社員の佐藤純哉さん(写真:右)も仙台七夕の美しい魅力にのめりこんだ一人。笑顔の絶えない親密な師弟関係が未来の仙台七夕を支えている。



【写真:左上】子どもたちに七夕飾りの作り方を教える鳴海幸一郎さん。【右上】ロサンゼルスで開催したワークショップの様様。【左下】震災支援の感謝を伝えるためのロシア演奏会場に展示された七夕飾り。

「仙台七夕携帯ストラップ」
くす玉はビーズ、吹き流しはリリアン糸で作られた、七夕飾りのストラップ。



「浪漫竹(ろまんちっく)」
鳴海屋紙商事が発売する、実際の飾りと同じ和紙を使用したミニ七夕セット。仙台七夕の特徴である七夕飾りがすべてそろっています。



鳴海屋紙商事(株)

○住所
【本社】仙台市若林区卸町二丁目14番地の5
【七夕企画室】仙台市青葉区一番町三丁目1番地の16 6F
○ホームページ
【七夕作成・販売サイト】
<http://www.tanabatank.co.jp/>
【紙・紙器製品販売】
<http://www.narumiya-k.co.jp/>

芸術性の高い七夕飾りは、妥協を許さないこだわりから生まれる。鳴海屋紙商事が依頼を受ける七夕飾りのデザインは、すべて山村さんが担当。依頼主となる企業や個人商店が扱っている商品、サービスの内容についてのヒアリングを行ったうえで図案のモチーフや配色を決め、ラフデザインを起していくそうです。「仙台の七夕飾りには独特のものがあり、色の組み合わせや立体化する感覚は説明できるものではありません。また、ファッションのコーディネートと違い、ある程度の距離を置いてみるものなので、大きく大胆かつ派手にしないと絵にならないんです。作業場で広げて見た時は良く見えても、実際の現場で高く吊ると見ると今ひとつ映えない時もあります。こればかりは経験を積まないと身につけませんね」と教えてくれました。

山村さん、鳴海屋紙商事の制作による七夕飾りは、その芸術性、品質の高さから圧倒的な支持を受けています。「同じ材料で同じ設計図に沿って作っても、作り手によって

仕上がりがかなり異なります。私が大切にしているのは、見る人が気づかないかもしれない細かい部分にも、どこまでもこだわってやること。納得できるまで手を抜かず、丁寧にやることを心がけています」。

市内で大小3000本にも及ぶ七夕飾りのうち、約3分の2は鳴海屋紙商事が制作したものだとか。山村さんは仙台七夕になくてはならない存在なのです。

仙台七夕の魅力が未来へと発信し続ける

仙台の七夕は、伊達政宗の時代(16世紀後半)17世紀前半)に始められたと伝えられています。400年もの長い歴史は、市民のさまざまな思いとともに、次世代への伝承によって繋がれてきました。山村さんをはじめとするスタッフの方々は、地元の学校はもちろん、修学旅行で仙台に来た子どもたちにも、七夕づくりのワークショップを行っています。「まずは子どもたちに七夕づくりの楽しさを知ってもらおうこと。仙台の七夕文化を途切れさせられるわけにはいき

ませんから」と山村さんは語ります。

また、仙台七夕の魅力を広く知ってもらうための活動は、国内にとどまりません。2010年からアメリカ・ロサンゼルスのリトル東京で開催されている七夕まつりでは、飾りづくりのワークショップを実施。また、日本政府や仙台市の要請を受け、中国、イスラエル、フランス、ロシアでも七夕飾りの展示を行うなど、積極的な活動を展開されています。

未曾有の震災が東北地方を襲った2011年3月。厳しすぎる現実の前に、誰もが大きな悲しみに包まれる中、5ヶ月後に迫った仙台七夕まつりは開催を危ぶむ声も少なくなかったそうです。しかし、山村さんは「中止になっても私一人でやろう」と心に決めていたと言います。その山村さんの被災者の心を和ませたいという強い思いは天の川を渡り、仙台七夕開催は現実のものとなりました。

復興への願いや鎮魂の祈り、我が子の成長や家族の健康、生まれ育った郷土への愛情。それぞれの深い思いがひとつのかたちになったものが仙台七夕なのかもしれません。



未来に遺すべき「紙文化」
「紙育 kami-iku」

辿る
Ta-do-ru

今回のテーマ

夏のお便り

 <p>サマーグリーティングカード 「効果音付き(ビールを注ぐ音)」 発売:サンリオ ラベル部分を押しとビールの栓を抜いて注ぐ音が聞こえる、ユニークなサマーカード。立てて飾ることもできる。</p>	 <p>サマーグリーティングカード 「夏の風物詩(ホタル)」 発売:サンリオ 虫かごのホタルをモチーフにしたポップアップカード。暗闇に置くと、ホタルのお尻の部分が発光する。</p>
---	--

暑い夏に「さわやかな気持ち」を届ける、
日本独自の美しい習慣。

風鈴や花火、朝顔、金魚といった夏の風物詩をあしらったイラストとともに、「お変わりありませんか」の言葉が添えられた暑中見舞いの便り。暑さ厳しい中、相手の健康を見舞って送る挨拶状ですが、ご無沙汰のお詫びや自身の近況報告、中元のお礼を兼ねる場合も多く、一服の清涼剤のように感じるものです。

この暑中見舞いは、お盆に親族や恩師の元を訪ねて進物を贈答する「盆礼」の習慣が簡略化したものといわれています。ハガキによる暑中見舞いのやりとりがはじまったのは大正時代で、昭和61年からはくじ付きハガキ(夏のおたより郵便葉書(かもめぐる*))が発売されるようになりました。暑中見舞いを送るのは、小暑(7月7日)から立秋(8月7日)の前日までの間、それ以降は「残暑見舞い」として送るのが一般的です。

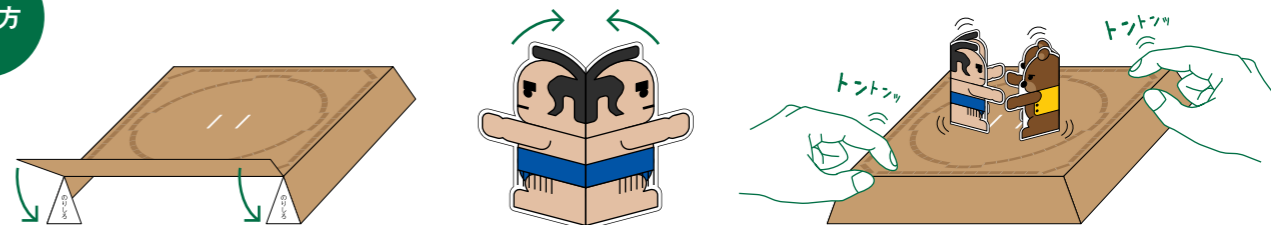
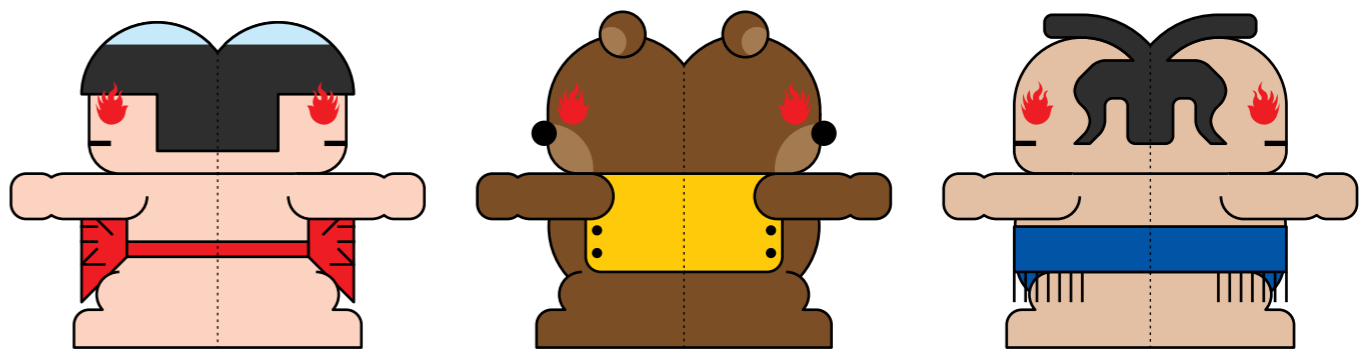
そんな暑中見舞いですが、従来のハガキの仕様から形を変え、楽しい機能をプラスしたものが登場するようになりました。うちわ形のものや温度計が付いているもの、さらには夏の風物詩を飾って楽しむものや夏らしさを演出する効果音が鳴るものなど、エンターテインメント性を重視したものが多数発売され注目されています。

暑中見舞いは、古くから季節の移り変わりを実感し、四季折々の日常的な行事を大切にしてきた、日本独自の美しい習慣です。この夏、お世話になっている方、ご無沙汰しているの方に、思いやりの気持ちを添えた便りを送ってみませんか？

※平成25年度「かもめぐる」の絵入り葉書は「すいかと「花火」2種類(発売中/8月23日まで)。また、「かもめぐる特設サイト」(http://www.post.japanpost.jp/kamome/)にて、「暑中・残暑見舞いの文例」や「オリジナルテンプレート」が無料でダウンロードできるコンテンツを公開中。

作り方

- 1 土俵となるパーツを切り取り、のりしろ部分がぴったり合うように貼る。
- 2 カ士を切り取ったうえで中心から折り、適度に角度をつける。
- 3 2体を土俵の上に乗せたら、土俵の隅を軽く叩き、組み組み開始。

紙の“先端”にフォーカス
「EDGE of PAPER」

01 世界初の透明連続シート「セルロースナノファイバー」
開発：王子ホールディングス(株)／三菱化学(株) http://www.ojholdings.co.jp/news/2013/130318_2.html

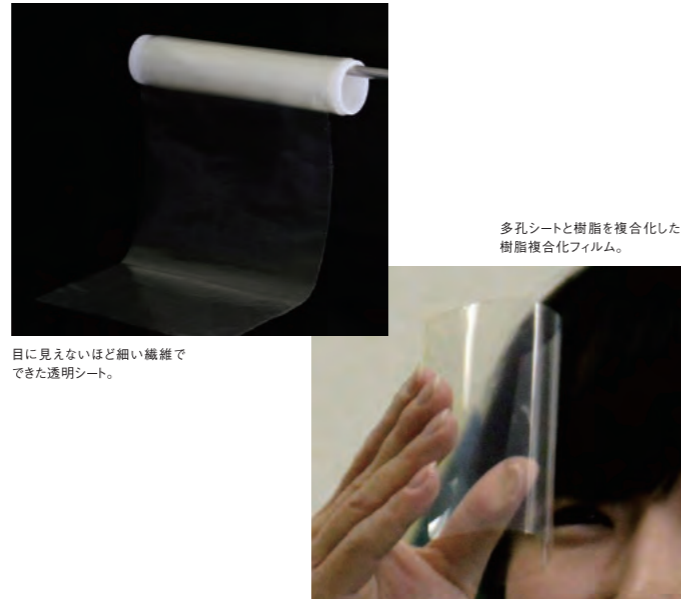
強くても軽く、環境にやさしい。世界初の透明な紙とは？

一見フィルムのような透明のシート。実はこれ、パルプから作られた真正正銘の「紙」なんです。

王子ホールディングスと三菱化学が共同で連続シート化に成功した透明な紙「セルロースナノファイバー」。その原料は、パルプをナノサイズまで解きほぐしたもので、その太さは髪の毛の2万分の1程度というから驚きです。植物由来のため、環境に与える影響も非常に小さい素材と言えます。

ガラスよりも丈夫で軽く、プラスチックよりも熱に強い。それでいて一般的な紙と同様に折りたたむことができるという特徴から、将来は電子ペーパー等のディスプレイをはじめとしたさまざまな分野での活用が期待できます。電子ペーパーも紙から作られる可能性があるということは、何とも興味深い。

両社は数年後をめどに実用化をめざしているとのこと。透明な紙が私たちの生活に変化をもたらす日もそう遠くないかもしれません。



多孔シートと樹脂を複合化した、樹脂複合化フィルム。

目に見えないほど細い繊維でできた透明シート。

02 「モーリアンエコポット」
問い合わせ：日本製紙クレシア(株) <http://www.crecia.co.jp/>

災害時に重宝する紙でできた
防災グッズ。

加熱容器は、発熱の膨張に耐えられる強度と耐水性を兼ね備えている。



9月1日の防災の日を前に、非常持ち出し袋に加えておきたい便利グッズをご紹介します。この「モーリアンエコポット」は、火を使わずにペットボトルの水をお湯にできるスグレものなんです。その使い方もかんたん。あらかじめ折り目のついた厚紙を畳むように折ったら中箱にセット。そこに温めるペットボトルを入れ、発熱剤に少量の水を注ぎ入れたら20分で約80度まで加熱することができます。

そして、この「モーリアンエコポット」の最大の特長は、すべての素材が紙であること。軽く、かさばらないので、登山やキャンプといったレジャーにも便利。紙ごみとして処分できるので、アウトドアにうってつけというわけです。

災害時の避難生活のなかでは、お湯は体を温める飲み物やカップ麺、赤ちゃんのミルクなどその用途も幅広く、当事者になって初めてその重要さに気づく人も多いそうです。備えあれば憂いなし。この機会に考えてみては？

紙に秘められた“こころ”に触れる
「紙が紡ぎ出すものがたり」

避暑地として名高い山梨県、八ヶ岳南麓の森のなかに佇む「高原アートギャラリー八ヶ岳」。開館から20年になるこのギャラリーを訪れる多くの人々に、根強い人気を誇るアートがある。フィンランド北部、サンタクロースの故郷といわれるラップランド地方のアーティスト、タルリーサ・ワレスタの作品だ。

ステンシルの手法で、数日をかけ手作業で多色刷りを行うタルリーサのアートには、森と湖の国フィンランドの自然とそこに棲む動物や植物、さらには森の住人である妖精たちが、非常に繊細にそして愛しげに表現されている。植物や動物が「生懸命に生きる姿」に対する共感、小さなものを大切に育てていく人生の喜び。それが作品の根底に流れるテーマである。

繊細で優しく、ファンタジックなタルリーサのアート。その作風や世界観をより魅力的にしている理由のひとつに「日本の和紙が使われている」という事実がある。

18年前、アートギャラリー八ヶ岳の片岡弘子氏がフィンランドの首都ヘルシンキを訪れ、街のギャラリーの一角でタルリーサの作品に出会ったとき、その作品はライスペーパーに刷られていた。ライスペーパーは日本の和紙に似た紙ではあるが、その風合いは和紙とは似て非なるもの。「もし日本の手漉き和紙に彼女の愛情溢れる絵柄をのせられたら、もっとすばらしい作品になるのでは」と考えた片岡氏は、フィンランドに何種類もの手漉き和紙を送った。するとタルリーサは、日本から送られた和紙で二度会って以来、その後は実際に会うことはなかったが、電話やファックス、メールのやりとりを通じて「心の通いあう友人」として互いの人生の悩みを語ったり、家族のできごとを伝えるなど、姉妹のような関係を続けていた。便りの最後には「Your sister」と綴るのが習慣であったという。

そうして迎えた、2012年5月。片岡氏はラップランドにタルリーサを訪ねる旅に出た。膝臓がんを患った彼女が「人生の最期のとき」を自宅で過ごしていると、本人からのメールで知ったからである。タルリーサの家を訪ねた片岡氏の目に飛び込んだのは、リビングの壁に飾られていた和風の丸い額。額に入られた色紙には、手描きの日本地図が描かれていた。彼女の祖父が教会の宣教師をしていて、日本にも訪れたことがあるという話は以前聞いていた。どうやらその当時、来日の際に手に入れた色紙のようである。何気なく額を裏返した片岡氏は、そこに書かれていた記述に驚きを隠せなかった。

額の裏書きには「紀元千九百二十六年一月下諏訪福音ルーテル教会信徒」とあった。いまから90年近くも前に祖父が宣教師として訪れていたその教

から送られた和紙での試作を繰り返し、和紙の持つ微妙な風合いがまた違った表情を作品に与えることをとても喜び、自らの作品に用いるようになったという。ふとした出会いから生まれた、フィンランドと日本との邂逅だった。

ふたりはヘルシンキで二度会って以来、その後は実際に会うことはなかったが、電話やファックス、メールのやりとりを通じて「心の通いあう友人」として互いの人生の悩みを語ったり、家族のできごとを伝えるなど、姉妹のような関係を続けていた。便りの最後には「Your sister」と綴るのが習慣であったという。

第六回 紙が結んだ不思議な縁
タルリーサ・ワレスタの「和紙との邂逅」



タルリーサ・ワレスタ
1947年ヘルシンキ生まれ。フィンランドの北、ラップランド地方の町・オウルで暮らしながら創作活動を行う。カッターを使い手で型紙を切り抜く手法で、1枚ずつ時間をかけた手刷りの作品を作ること知られる。北欧に伝わる妖精や森の生き物たちの絵が物語を紡ぎ出す叙情的な作品に魅せられるファンが多い。2012年7月没。



作品「春のささやき」



リビングに飾られた額の裏側毛筆で書かれた日本語。

会は、タルリーサの作品を展示している高原アートギャラリーから、車でわずか30分という距離にある教会だったからである。単なる偶然では表しきれない不思議な縁が、そこにはあった。

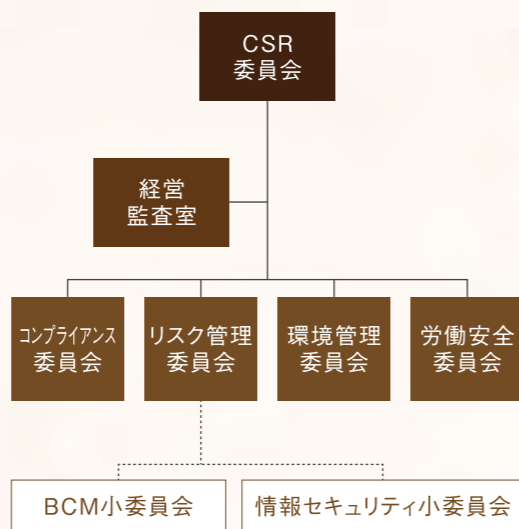
2012年7月5日。タルリーサ・ワレスタは65歳の早すぎる人生に幕を閉じた。しかし、日本の和紙に色紙色でいねいに刷られたその作品は、たくさんの日本人のもとで、これからも愛され続けていく。

CSR COMMITTEE

信頼される企業をめざし、CSR体制を強化。

当社では本年4月より、企業活動に関わるさまざまな課題への対応機関として、CSR(企業の社会的責任)の観点から新たな体制を発足しました。新体制では社長を委員長とするCSR委員会が全般の審議、活動の検討を行い、下部組織の4委員会と2小委員会では年間の行動計画をたて、実行・検証を行うことでCSR体制の強化をはかります。

また、これに伴い「企業行動指標」及び「社員行動基準」を見直し、関係会社を含むグループ全体の社員一人ひとりが企業市民としてのあり方を再認識しました。国際紙パルプ商事グループは透明性の向上と、持続的発展をはかり、皆さまからより一層信頼される企業をめざします。



RECREATION

本社屋上でいちご狩りを実施。

当社はヒートアイランド現象の緩和、省電力化によるCO2排出量の削減を目的として本社屋上を緑化し、庭園・菜園として活用しています。5月上旬、その屋上菜園において、社員によるいちご狩りを開催。事前に申し込みをした社員が昼休みに集まり、真っ赤に実ったいちごを収穫しました。今年は生育が良く、例年より多く実りました。これまで収穫した野菜は本社食堂にて提供していましたが、社員自らが収穫に参加する体験は初めてで、仕事の合間の良きリフレッシュになりました。

また、今年1月に菜園の改良を行ったことで、根菜などの根の深い野菜も育てられるようになりました。今後も屋上菜園を利用したイベントを企画し、地域や社員とのコミュニケーションの場として活用してまいります。



RECYCLING

仙台七夕の竹を再利用し、地域の活性化につなげる“仙台七夕竹紙プロジェクト”が今夏本格始動。

毎年8月6日から8日まで開催される「仙台七夕まつり」。その七夕飾りに使用した青竹は、これまで行政によって回収、焼却処分されていました。その青竹を原料として印刷用紙に再生し、翌年の仙台七夕で使用する飾りの材料、宮城・仙台のPRツールとして活用しようというのが、「仙台七夕竹紙プロジェクト」です。このプロジェクトは、当社子会社である鳴海屋紙商事と国際紙パルプ商事仙台支店が連携し、今年の仙台七夕まつりから本格的にスタートする予定です。

本プロジェクト発足のきっかけは、鳴海屋紙商事が鹿児島県薩摩川内市で七夕飾りの技術指導を行ったこと。これは、地名に“せんだい”の名称が含まれている縁もあり、実現したものです。その後、同市に工場

を持ち、国産竹100%の紙を製造販売する中越パルプ工業から、竹紙で作った七夕用短冊の無償提供を受けたことを契機に、仙台七夕の竹を有効活用する企画が立ち上がりました。昨年の仙台七夕ではテスト実施として、実際に使用された1トンの青竹を回収。手作業による選別、工場への輸送を経て、竹紙の一部として使用されました。また、竹紙は仙台市内の名所・旧跡、各地の風景を水彩画にした「仙台下町百景」をあしらったカレンダーに用いられ、地域の魅力PRに寄与しました。

仙台七夕の竹を「竹紙」にリサイクルし、七夕文化の継承・発展、さらには地域の活性化に役立てる新たな試み。その価値を東北・仙台から全国に発信します。



2012年に発売された「仙台下町百景」の卓上カレンダー

「仙台下町百景」の絵葉書セット

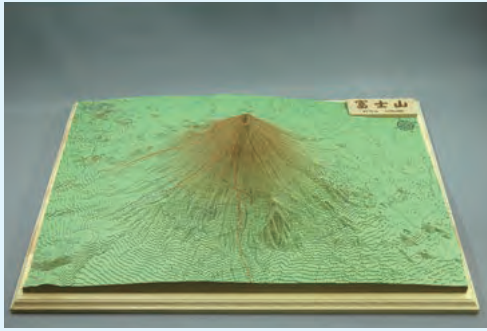
表紙、中紙にクラフト色の竹紙を使用した一筆箋

紙の持つ可能性・面白さ再発見 「PAPER TRIVIA」

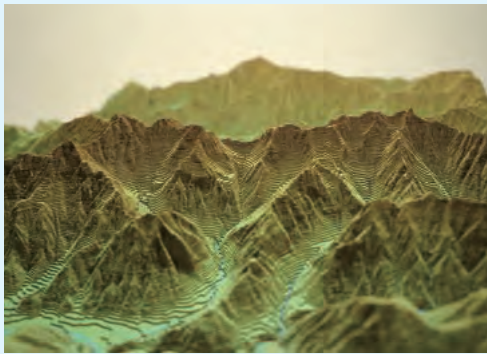
山を輪切りにした紙を重ねてつくる 山岳立体模型キット「やまつみ」。

日本は国土面積の約70%を山岳地帯が占める、世界でも珍しい山の国。古くから山をあげ、山に親しんできた日本人にとって山は心の源流であり、登山やトレッキングを気軽に楽しむ人も年々増えてきています。

そんな多くの山好きに支持された話題となっているのが、紙でつくる山岳立体模型キット「やまつみ」です。これは、等高線でカットし、シール加工を施した厚紙を下から順番に貼り重ねていくだけでリアルな山の立体模型が作れるというもの。パーツのデータは、国土地理院が発行する2万5千分の1地形図の等高線情報をもと



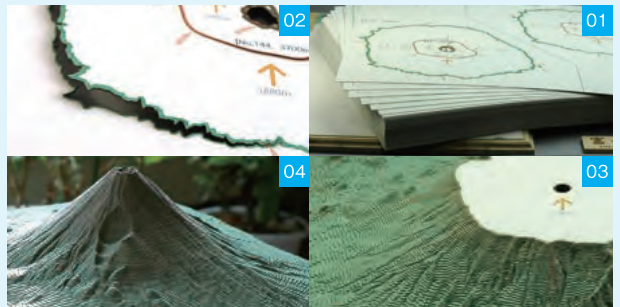
富士山は完成時のサイズ400×300×95mm。窓辺に置いて、自然な光でできる影を眺めるのがおすすめ。



穂高連峰の複雑な起伏もみごとに再現。登山道も印刷されている。

に作成されているので高精度。地表の色や主要な道路、登山道なども印刷されているので着色の煩わしさもなく、美しい模型に仕上げるができます。

この「やまつみ」の商品化がスタートしたのは約2年前。発売元であるキューアールシーの担当者に商品化で一番苦労したことを聞くと、「等高線のトレースですね。北アルプスのように広域なものになると、トレースだけで3ヶ月もかかったこともありました」とのこと。その後、スプレー糊で貼り重ねる仕様をシールに変更するなど改良を重ね、現在は20の名山が商



01 紙は、牛乳パックなどのリサイクル再生紙を使用。02 シールはすでに等高線で切断されており、カッターは不要。03 1/50,000シリーズの場合、1枚の紙で20m分の標高となる。04 日の当たり方で変わる影によって、山の形がより際立つ。

品ラインナップとして並ぶほどになりました。「目標は、日本百名山制覇です。また、関ヶ原や桶狭間などの古戦場、硫黄島のような特殊な歴史を持った島などの商品化も計画中です」と教えていただきました。

実際の山を二歩一歩登るように、山の起伏を楽しみながら一枚ずつ積み上げていく「やまつみ」。作り上げる過程とともに、できあがったときの壮大な景観を、ご自宅のリビングで楽しんでみませんか。

「やまつみ」発売(有)キューアールシー
<http://www.yamatsumi.jp/>

編集後記

今号の表紙写真は七夕飾りの吹き流しを真下から撮影したものです。おわかりになりましたでしょうか。当社では昨年引き続き6月24日より8月9日までの期間、本社エントランスに七夕飾りを展示しています。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。そしてもし機会があれば実際に仙台七夕へ足を運んでみて下さい。私のおすすめはかまぼこのアメリカンドック「ひょうたん揚げ」！宮城県内で育った私が仙台へ行った際に食べていたおやつです。また最近では福島の名物で凍み餅にドーナツ風の生地をつけて揚げた「凍たん」が仙台へ店舗を広げ営業しています。こちらも美味しいですよ。どうして高カロリーな物って美味しいんでしょう！みなさんも東北のおやつを食べて支援！(M・T)

『TSUNAGU』の編集に初めて関わったのは、2008年10月発行の4号でした。以来、足掛け6年、今16号まで多くのアーティストや職人の方々と出会う機会をいただきました。計算しつくされた精緻な作品、思わず微笑んでしまうユーモラスな作品、研ぎ澄まされた職人の至高の技の数々。どれも感動の連続でした。この感動を多くの皆さんに伝えて共有したい！というのが、編集者としての私の目標であり、自らに課した使命でもありました。読後に、ああ紙つてやっぱすごいなあと思っただけなら最高です。

これからも『TSUNAGU』が弊社と読者との留まらず、紙に触れる多くの方々と結ぶ存在であり続けることを願ってやみません。(T・K)

感じる
Kan-ji-ru

美しい四季の情景を思い浮かべる
「季節の一冊」



おべんとうの時間

写真:阿部了 文:阿部直美/木楽舎

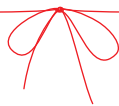
ありふれたお弁当が物語る
食べる人の人生と家族のドラマ。

夫はカメラマン、妻はフリーライターという阿部夫妻が、日本各地の手づくり弁当を取材。その土地で生きる人々の日々の営みを、お弁当を通してありのままに伝えるフォトエッセイ集だ。そこに登場するのは、船頭、農協職員、海女、住職、駅員、素麺職人、営業マン、高校生、幼稚園児など、職業、年代もさまざまな人たち。彼らの『いつものお弁当』について、お弁当や人物、食事風景を切り取った写真と、本人の飾り気のない口調で綴る。

冒頭に紹介されているのは、牛舎を回って搾乳を集めるのが仕事だという土屋さん。でっかく丸いおにぎりに、海苔を2枚巻いただけのお弁当は、「かあちゃんに迷惑かけないように」と、毎日自分で作る。仕事帰りに立ち寄るスーパーで、明日のおにぎりの具材と娘が好きなアイスを買うのが楽しみという飾り気のない言葉に、家族への溢れんばかりの愛情が伝わってくる。

夫の健康を気づかされた野菜が多めのお弁当や、わが子の喜ぶ顔を思い浮かべながら好物を詰めたお弁当。「弁当は、作る人と作ってもらう人の2人で食べるもの」という営業マン・中野さんの言葉どおり、お弁当は相手への思いが込められた、ちよびりシャイな伝言であることに気づかされる。

お盆休みに帰省される方、母の味とともに、当時のお弁当を思い出してみませんか。



輸送マイルージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインキを使用しています。

エコプレス
パウダー

針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.